

学位論文題名

北ユーラシアにおける旧石器時代の住居構造論的研究

学位論文内容の要旨

旧石器時代に住居が存在することを最初に考古学的に提示したのは、ソヴィエト・ロシア考古学であった。1930年代以降のソヴィエト・ロシア考古学から発信された旧石器時代研究の住居・集落論研究は、社会組織や経済活動の復元という新たな研究領域を開拓し、その後の1940年代のフランスやチェコにおける旧石器時代の住居論研究に影響を与えた。また G.チャイルドが自ら語っているように、彼の社会考古学の構想にも理論的に深く影響を与えていることは周知の通りである。さらに戦後期の日本考古学における旧石器時代の住居・集落論の展開においてもソヴィエト・ロシア考古学の成果を下敷きに多くの議論が展開されてきたのである。

本論文では、ソヴィエト旧石器研究の理論的枠組みを学史的に検討するという資料批判的研究を展開した第一部と、先行研究の批判的検討を基盤に新たな資料操作の方法論を提示する実証的研究を展開した第2部とに分かれる。第一部では、主にこれまで世界各地の旧石器時代の住居・集落論研究や後の空間分布論研究に強い影響を与えたと評価されてきたソヴィエト旧石器考古学の住居・集落論が当時の社会的・政治的背景との関係から批判的に検討されている。また第2部では、人間活動の検討の際に必要な考古学資料の一次情報としての客観性について、自らの詳細な復元研究によって操作概念が提示され、今後の空間論研究の新たな可能性が示めされている。

ここで提示される課題とは、一つは実体として確認される物質資料である考古学資料が、考古学者の想定するほど客観的な資料ではなく、考古学者の帰属する社会や集団の規範を反映したものであり、その評価には研究者をとりまく時代性を考慮する必要が述べられている。さらに二つ目の課題としては、住居という人間と自然環境との相互作用を象徴する生活・活動痕跡の考古学的評価の意義が示されている。

第1章は、1920年代から1930年代のソヴィエトにおけるマルクス・レーニン主義と考古学との関係についての検討が行われている。ポストソヴィエト期研究の流れの一環に位置づけられる学史研究を代表するワシリエフとフォルモーゾフの研究を基礎としての考察であるが、1930年代の研究を牽引したペテルブルク学派からの視点と、モスクワ学派からの批判的視点という異なる学史研究を比較検討した点では評価できる一方で、検証された

内容は、先行研究の枠の中にとどまっており、やや迫力に欠ける結果となっている。

第2章では、ソヴィエト旧石器研究を牽引した国立アカデミー物質文化史研究所の研究視点の変遷を批判的に検討している。物質文化史研究所は、まさに1920年代から1950年代にかけてソヴィエト旧石器考古学の理論研究を主導した研究機関であり、その理論的研究を具体的に検討するという試みは、これまでなされたことがなく、先駆的な試みである。とりわけ本論文で一次資料として取り上げられた『国立アカデミー物質文化史研究所報告(СГАИМК)』は、わが国の大学研究機関には完本として所蔵されておらず、この詳細な検討は、はじめての試みである。編集部見解の変遷を時系列に検討していった手法とその資料的価値は、高く評価することができる。

第3章は、ソヴィエト旧石器考古学における住居・集落論研究に焦点をあて、住居構造の認定過程についての検討をおこなっている。P.P.エフィメンコによる『原始社会』におけるコスチョンキI遺跡における大型住居の評価、そして初版(1934年)から第2版(1938年)、第3版(1954年)における定住的な母権制に基づく氏族社会の成立時期の評価の変化を指摘している。またエフィメンコに続き研究を牽引したA.N.ロガチェフによるコスチョンキIV遺跡ほかでの社会経済論的研究の特色とエフィメンコの導いた原始社会像との比較が試みられている。加えて住居構造を議論の変遷を学史的に追うとともに、1960年代以降の動向をグリゴリーエフ、ベリヤーエヴァ、メドヴェージェフ、ワシリエフ、アミルハーノフらの諸論を参照しつつ論点を整理している。ここでは、1980年代以降の西側考古学とりわけ、北米で展開されたプロセス考古学の民族考古学的研究成果の影響や、ポストソヴィエト期以降の地質考古学的研究視点からの遺跡形成論的検討の流れが取り上げられており、ソヴィエト・ロシア考古学における住居構造論研究の変遷を理解することができ、学会においても今後注目される成果となるであろう。

第4章では、西シベリアに位置するカンチェギール1遺跡出土資料をもとに具体的な調査資料を利用し、遺跡空間のなかから居住痕跡を導き出すための方法点検討がおこなわれている。

第5章と第6章においては、西シベリアに位置するウイII遺跡出土資料と検出された生活面の調査記録を用いて、炉という旧石器時代の人間活動の中心的施設の周囲に残される考古資料から道具製作や道具使用という日常的な活動痕跡がどのように形成され、遺存されるのかが検討される。自ら資料の個別観察と空間分布の確認そして生活活動の復元をおこなう過程が詳述される。

第7章では第5章と第6章において提示された活動復元の痕跡が具体的にどのような地点を占有した集団や個人によって形成されたのかをウイII遺跡の事例をもとに復元し、住居構造を同定するプロセスが提示されている。

第8章は、これまでの議論と分析を通じて展開されてきた旧石器時代の住居構造を認

定するための諸条件が提示される。また旧石器時代の住居構造のもつ特徴として「顕在構造」と「潜在構造」とが存在することが示されている。

終章では、本論文の中で展開されてきた議論を異なる研究基盤と歴史的背景をもつ研究者による考古資料の再評価の試みであることが述べられ、改めて考古資料が資料化される過程と別の視点からの再評価との間に生じる歴史的評価の視点の差異の存在、その要因となる研究者個人の社会性や政治性の存在が指摘される。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 加 藤 博 文

副 査 教 授 佐々木 亨

副 査 准教授 谷 本 晃 久

学 位 論 文 題 名

北ユーラシアにおける旧石器時代の住居構造論的研究

本論文についての審査は、提出された論文を審査委員がそれぞれ精読し、計5回の審査委員会と、申請者への口述審査を経て実施した。

本論文は、学史研究としての第1部と実資料の分析により復元研究である第2部によって構成されている。第1部における議論は、研究活動および研究者に集団が帰属する社会やとりまく時代性が与えた影響を改めて評価し、考古資料の位置づけや歴史的評価を再検討しようとする近年の理論考古学の議論の流れに位置づけられるものである。旧ソヴィエト旧石器考古学は、その先駆的な視座と調査手法の開発によってその後のフランスにおける古民族学派の空間分析論や北米の生態学的視座をもったプロセス考古学派の民族考古学研究、さらに日本における旧石器時代の住居・集落論にも強い影響を与えたことが知られている。

本論文では、このような研究の背景を旧社会主義国家としてのソ連邦の成立過程の中で旧石器考古学が担わされた社会的・政治的機能を指摘する中で、とくに当時を代表するエフィメンコとロガチェフの著作における言説の時代的变化を辿り比較し、その資料的客観性の脆弱さが明らかにされる。また当時の研究の中心的機関であった1930年代の国立アカデミー物質文化史研究所紀要を基に一次文献を読み解く作業から当時の考古学とそれを取り巻く政治・社会環境を明示した点は、これまでの研究には見られなかった独自のものであり、提示された資料自体も希少であり今後の研究に大きく貢献するものとして評価できた。また第2部では、第1部で明らかにした問題点を自覚した上で、これまで海外の研究者にはアクセスが困難であったロシア科学アカデミー物質文化史研究所所蔵の出土資料を改めて観察し、さらに石材判別法という日本考古学において蓄積された手法を導入し再分析することで、旧石器時代の居住空間の活動の復元に成功している。

一方で課題としては、具体的な資料分析を展開した第2部の資料的位置づけが第1部

の学史的議論とどのように関わるのかという点での説明が不足しており、第1部と第2部との論文と連続性を十分に示しきれていなかった。ただしこの点は、口述において申請者より説明を受け、審査委員一同で確認をおこなった。またこの種の議論を展開するために不可欠な個別の用語についての従来の定義と本論における定義との間の相違点が明確に示されていない部分が目につくが、今後の課題とされよう。

しかしながら、これらの点を考慮しても、これまで未公開の資料を駆使した学史的検討実証的にすすめ、さらに新たに基礎資料を自ら操作分析することにより遺跡から住居構造を認定する独自の基準を提起するなどの取り組みも見られるなど、本論文の当該領域の研究への果たす貢献は、高いと判断することができる。

審査委員会は、提出された申請論文を慎重に審査し、また口述試問等を実施して、十分に審議をかさねた結果、以上のべたような本論文の評価に鑑み、全員一致して、鈴木建治氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達した。